

[B年] 聖霊降臨節第5主日(2022年7月3日)**【旧約聖書日課】アモス書 7章10～15節**

10ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。」

11アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。

イスラエルは、必ず捕らえられてその土地から連れ去られる。』

12アマツヤはアモスに言った。

「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。13だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」14アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」

15主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。

【使徒書日課】使徒言行録 13章1～12節

1アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。2彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」3そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

4聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、5サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。6島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に会った。7この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。8魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。

9パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、10言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。11今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。12総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

【福音書日課】マルコによる福音書 6章1～13節

1イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。2安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。4イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。7そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、8旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、9ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。10また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。11しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようもしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とすなさい。」12十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。13そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

アモス書 7章10～15節

10それからベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家のただ中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられませぬ。」

11アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣によって死ぬ。

イスラエルは必ず捕らえられて
その土地から捕囚として連れ去られる。』」

12アマツヤはアモスに言った。

「予見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこでパンを食べ、そこで預言するがよい。13だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」14それに対してアモスはアマツヤに言った。「私は預言者ではなく、預言者の弟子でもない。私は家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」

15主が羊の群れを追っている私を取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と私に言われた。

使徒言行録 13章1～12節

1さて、アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデの幼なじみ〔別訳→乳兄弟〕マナエン、サウロなど、預言者や教師たちがいた。2彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロを私のために選び出しなさい。私が前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」3そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

4聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、5サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。6島全体を巡ってパフォスまで来ると、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスと言う偽預言者に会った。7この男は、総督セルギウス・パウルスという賢明な人物のもとにいた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞くとした。8魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、総督をこの信仰から遠ざけようとした。9パウロとも呼ばれ

ていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、10言った。「ああ、あらゆる偽りと不正に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。11今こそ、主の御手はお前の上にご下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、誰か手を引いてくれる人を探した。12総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

マルコによる福音書 6章1～13節

1イエスはそこを去って、故郷にお帰りになった。弟子たちも従った。2安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人の授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡は、一体何か。3この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで私たちと一緒に住んでいるではないか。」こうして、人々はイエスにつまづいた。4イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親族、家族の間だけである。」5そこでは、ごく僅かの病人に手を置いて癒されたほかは、何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6そして、人々の不信仰に驚かれた。それから、イエスは、近くの村を教えて回られた。

7イエスは、十二人を呼び寄せ、二人ずつ遣わすことにされた。その際、汚れた霊を追い出す権能を授け、8次のように命じられた。旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金〔直訳→銅貨〕も持たず、9ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と。10また、こう言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から出て行くまでは、そこにどまりなさい。11あなたがたを受け入れず、あなたがたに耳を傾けようとする所があれば、そこを出て行くとき、彼らへの抗議のしるしに〔直訳→証しとして〕足の埃を払い落とさなさい。」12十二人は出て行って、悔い改めを宣べ伝えた。13また、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒した。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・7月3日「聖霊降臨節第5主日」の日課主題は「宣教への派遣」。神の言葉を告げ知らせる活動としての宣教は、旧約・新約を通じて「神の民」が神からの使命とされている営みであり、「民」としてのみならず、「民」に属する個人においてもその使命の自覚と参与が求められている。

・使徒書日課は、「使徒言行録」から、アンティオキアの教会共同体が形成されて間もなく、バルナバとサウルを中核とした宣教団を派遣したことを伝える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、故郷での主イエスの活動、続いて十二人の弟子たちの宣教派遣を伝える箇所。旧約日課は、「アモス書」から、預言者アモスの宣教活動について物語る唯一の箇所。

旧約日課(アモス7章より)

・「アモス書」は、ユダヤ正典「後の預言者」に含まれる「十二小預言者」中、三番目に置かれた預言書。預言者アモスは、前8世紀、北王国末期、イェフ王朝最盛期のヤロブアム王の時代に北王国で活動を始め、後に南王国に亡命して預言活動を続けたと考えられている。北王国史において、イェフ王朝時代以前は、各地の地方聖所を拠点とする祭司集団は王権と独立した地方権力を形成していたが、オムリ王朝時代にエリシャのもとに集結した各地の祭司集団連合が後ろ盾となってイェフ王朝を成立させると、イェフ王朝時代を通して、王権と協力関係を維持した祭司集団が王宮祭司＝宮廷預言者として活動するようになったと考えられる。イェフ王朝を支えた祭司集団の詳細は明らかではないが、ベテルの祭司・預言者集団が重要な役割を果たしたことは間違いない(王下2章によれば、イェフ王朝樹立に関与した預言者エリシャは、エリヤのカリスマを継承するに際して、本来の拠点であるギルガルのほか、ベテルの預言者、エリコの預言者らの支持を受けている)。ベテルは、古い族長伝承(ヤコブ伝承)にまで遡る古い聖所であるが、王国史においては、ソロモンの王国が分裂して南北に分かれた際、北王国イスラエルの守護聖所としてベテルとダンに「金の子牛」の祭壇が設けられている(王上12章)。預言者アモスは、日課箇所でも、「ベテルの祭司アマツヤ」によって、今後ベテルで預言することを禁じられているが、これは、アモスがもともとベテル聖所に連なる祭司集団に属していたことを示唆している。

・アモスの預言集は、北王国イスラエルのみならず、南王国ユダを含む諸国に対する裁きの告知としてまとめられている。ベテルで預言活動を始めたアモスは、その反王国的発言によって活動を禁じられるが、追放された先の南王国のエルサレム祭司団に受け入れられて預言活動を続けたのだろう。当時の南北両王国は対立関係にあり、南王国にとってアモスは利用価値があったと考えられる。

使徒書日課(使徒13章より)

・「使徒言行録」については、前回までの資料を参照。
 ・日課箇所に描かれる「アンティオキアの教会」については、11章でその成り立ちについて物語られている。それによれば、アンティオキアの教会共同体は、エルサレムの教会共同体で起こった分裂騒動がきっかけとなって形成されることになった。エルサレムの教会共同体は、元来、生前の主イエスと行動を共にした120人程の弟子たちが「使徒たち」を中心として主イエスの教えと実践を継承する「ガリラヤ出身者の新しい会堂」活動として始まったが、そこに、各地から神殿祭儀に参加するために巡礼してきていたディアスポラのユダヤ人が加わるようになると、両者の間にさまざまな軋轢が生じ、結果として、後から加わったディアスポラ系ユダヤ人信者はことごとくエルサレムに残ることなくそれぞれの生活地に戻っていくことになった。その「離散した新しい弟子たち」をそれぞれの地で再結集し、「使徒たち」に連なる教会共同体として形成する試みが各地で進められたが、ユダヤ人の一大居住地であったシリア州の州都アンティオキアでも、同様の共同体形成が進められたのである。このアンティオキアの教会共同体をエルサレムの「使徒たちの教会共同体」と結びつける役割を担う「使徒の代理人」として送り込まれたのが、バルナバであった。バルナバは、かつて教会共同体の迫害者として活動しながら転向して今はダマスコの教会共同体の一員となっているサウロ(パウロ)を協力者として呼び寄せ、片腕として重用した。そして、アンティオキアに一定の共同体形成が為されると、さらに各地に散在している「離散した新しい弟子たち」に彼らを核とした教会共同体を形成させるべく、宣教団を組織し、各地を巡ることにしたのである。

・日課箇所は、バルナバ宣教団の組織と派遣、そして最初の活動地であるキプロス島での活動の様子が伝えられている。このキプロス島での逸話を伝える中で、「使徒言行録」は、初めて「サウロ」の名を「パウロ」に言い換えている(9節)。「サウロ」は、この後からはもっぱら「パウロ」として描かれるのである。通俗的に、「サウロ」は回心によって「パウロ」を名乗るようになったと説明されることがあるが、「使徒言行録」は、そのように描いてはいない。むしろ、慎重に、彼がユダヤ名としての「サウロ」と「パウロ」の名を使い分けていたことを示そうとしているのである。「パウロ」の名は、ラテン語に由来するローマ人に広くつけられた名であり、おそらく、彼が「生まれながらローマ帝国の市民」(22:28)であることから推測して、生まれたときにユダヤ名「サウロ」と合わせて付けられた名であったのだろう。当時のユダヤ人は、ユダヤ名とギリシア・ラテン名を併用し、状況に応じて使い分けていることが一般的であった。「使徒言行録」は、この場面以降、彼がもっぱらローマ社会に宣教の対象を向けていくことになるものとして、ここで彼の名を切り替えているのであろう。

・そのことを象徴的に示す逸話として、この地(キプロス島)での活動で、同地の地方総督セルギウス・パウルスと交流を持ったことを伝えているのだろう。バルナバ宣教団は、当然、他の多くの人と接触したはずであるが、この逸話に集中するのは、このローマ帝国の支配層を代表する総督が「パウロ」と同じ名を持つ人物であったからだと考えられる。ローマ人社会を代表する「パウルス」と交流をもった「サウロ」は、もはやユダヤ人としてよりもローマ人社会に属する「パウロ」としての立ち位置で、この後の活動を方向づけられた者として描かれるのである。「パウロ書簡」では、「サウロ」の名は用いられず、もっぱら「パウロ」を名乗っている。

福音書日課(マルコ 6 章より)

・日課箇所は、二つの逸話から成り、前半は主イエスが宣教活動の一環として故郷ナザレに行かれた際の様子を伝える逸話、後半は宣教活動の一環として十二人の弟子たちを二人一組で派遣されたことを伝える逸話である。二つの逸話は、いずれも共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、この二つを接続して伝えているのはマルコ福音書だけで、マタイとルカは、それぞれ別個の文脈に置いて伝えている。

・主イエスが故郷ナザレで歓迎されなかったことは、共観福音書が共通して伝えているように、初代教会において主イエスを理解する上で重要な視点と考えられていたようである。つまり、主イエスの人となりは、実際のところ特別な見るべきところのあるようなものだったわけではなく、後の教会伝承が物語るような「神童」として知られていたわけでもない。主イエスには、普通の人々がそうであるように、多くの兄弟姉妹があり、彼らによってどのような家庭生活、家族関係を持っていたのかは、隠しようのない人物であった。つまり、普通の人として生まれ育った人物であった。このことを、共観福音書は、この逸話を外さないことで、明瞭に示しているのである。そのような人物としての主イエスを前提にした上で、なぜ主イエスが「神の子」と呼ばれるのかを示そうとしているのである。

・ここで主イエスの兄弟として挙げられる「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン」のうち、後の教会でも知られるのは「ヤコブ」である(ガラテヤ 1:19「主の兄弟ヤコブ」)。主イエスの十字架刑を見届けた女性のリストで出てくる「小ヤコブとヨセの母マリア」の「ヤコブとヨセ」が、主イエスの兄弟二人を指すかどうかは、意見が分かれる。・十二人の弟子たちの派遣では、「汚れた霊(ペネウマ・アカタアルトス)に対する権能を授け」られたことが、特記事項となっている。この箇所の最後に出てくる「悪霊(ダイモニオン)」は、元来「汚れた霊」とは異なる概念であるが、ここでは、一定の共通性を有するものとして置き換えられているのだろう。「霊」的な実体が人に影響を及ぼす力として働くとき「ダイモニオン」と呼ばれるのである。

来週の誕生日 (7月3日～9日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-18 番「心を高くあげよ！」(= II 1)は、コロサイ 3:1~4 に基づく伝統的な聖餐祈禱冒頭の「スルスム・コルダ SURSUM CORDA」(「心を高く上げなさい」との呼びかけに対して、「わたしたちは心を高く上げます」と応答)に基づく讚美。作詞者バトラーは19世紀英国教会の司祭で、自分が校長として勤める学校の讚美歌集のために作詞。作曲者スミスは20世紀米国聖公会の司祭。
- ・21-57 番「ガリラヤの風がおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「とも」にうたおうの歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・蔦田尚昊が曲を付した。
- ・21-524 番「われらみ名により」は、20世紀初頭の英国で指導的な立場にあった讚美歌作家ディアマー作詞の聖餐讚美歌。曲は、20世紀前半に米国で活躍した音楽家フリーデルがこの詞のために作曲。

21-18「心を高くあげよ！」

Lift Up Your Hearts! We Lift them, Lord, to Thee

1. 'Lift up your hearts!' We lift them, Lord, to thee; / here at thy feet none other may we see: / 'lift up your hearts!' E'en so, with one accord, / we lift them up, we lift them to the Lord.
2. Above the level of the former years, / the mire of sin, the slough of guilty fears, / the mist of doubt, the blight of love's decay, / O Lord of light, lift all our hearts to-day.
3. Above the swamps of subterfuge and shame, / the deeds, the thoughts, that honour may not name, / the halting tongue that dares not tell the whole, / O Lord of truth, lift every Christian soul.
4. Lift every gift that thou thyself hast given: / low lies the best till lifted up to heaven; / low lie the bounding heart, the teeming brain, / till, sent from God, they mount to God again.
5. Then, as the trumpet-call in after years, / 'Lift up your hearts!' rings pealing in our ears, / still shall those hearts respond with full accord, / 'We lift them up, we lift them to the Lord!'

21-524「われらみ名により」

Draw Us in the Spirit's Tether

1. Draw us in the Spirit's tether, / For when humbly in Thy name, / Two or three are met together / Thou are in the midst of them; / Alleluia! Alleluia! / Touch we now Thy garment's hem.
2. As the brethren used to gather / In the name of Christ to sup, / Then with thanks to God the Father / Break the bread and bless the cup, / Alleluia! Alleluia! / So knit Thou our friendship up.
3. All our meals and all our living / Make as sacraments of Thee, / That by caring, helping, giving / We may true disciples be. / Alleluia! Alleluia! / We will serve Thee faithfully.